

- 日の授業の中であらためて紹介したが、タ  
イムリーであった。
- 31 慶應大学グループ、男女産み分けに成功、X  
精子を分離、受精のニュース（同日朝刊）  
……6月2日の授業の際、コピーを資料と  
して配布。
6. 19 ベトナムの結合体児、ベトちゃん・ドクちゃん  
が治療のため来日。（5月6日の授業で、  
二人の元気なときのビデオ・テープを全員  
で見ていたので、ベトちゃんの治療の様子  
には皆関心を寄せていた。）10月29日帰国
- 23 東海村の動力炉・核燃料開発事業団東海事業

- 所で、IAEAの査察官ら12人がブルトン  
ウムによる放射能汚染。
9. 7 日本産婦人科学会倫理委、男女産み分けにつ  
いて、当面、遺伝病の予防治療に限定して  
認める意見書をまとめた。
- 24 日本移植学会は、専門医が脳死を判定すれば  
臓器を移植してもよい、との立場を明確に  
する。
11. 1 和歌山で新興宗教信者の女性7人が集団焼身  
自殺（同日夕刊）  
……11日の“自殺について”の際にも、話  
題となった。

## II. 生徒たちは何を学んだか

田 中 裕 己

教育方法改善プロジェクト「生徒の学習意欲を高めるための様々な工夫」の報告書および次章の徳井論文においても、一部、触れられていることではあるが、この一年間の授業の中で、数回実施されたテストやアンケートの結果を紹介したい。ここに示された生徒たちの意見や反応を分析することによって、「総合学習」の時間が生徒たちにとっていかなる意味をもっていたのか、より正確な実像を把握することが可能になるのではないかと思う。

### 1. 一学期中間テストについて

中間テストの前書きと、テスト問題は次の通りであった。

#### 高3「総合学習」第1学期中間考查問題用紙

「総合学習」生命について考える がスタートして2ヵ月。君たちも授業がどのように展開していくのか分らない。私たち教師の側も生命をめぐる様々な問題を勉強しながら、最先端の問題をいかに君たちにも理解しやすく、そして君たちの問題意識につなげて行くかを考えてきました。お互いに試行錯誤であり、手さぐりの状態でした。でもそれは仕方ありません。今回の試みは私たちとしても初めてのことであり、全国の高校をさがしてみてもおそらく初めての試みだと思います。ですから参考にできる先例が全くないわけですし、適切なテキストも用意されているわけではありませんでした。

2年生の2学期末に配布し、4月の第1回の授業の

時にも配った「広告 総合学習への招待」を思い出して下さい。そこには、「生命について一緒に考えて行こう」という呼びかけがあるはずです。試験についても「暗記した量よりも、生命についてどれだけ深く広く考えたかが分かるような問題としたい」と書いてあるはずです。4月以後、10回の授業がありました。担当の教師たちはそれぞれにベストを尽したはずですが、君たちの方はどうだったでしょうか。

おしゃべりに終始したり、内職に精を出していることがなかったでしょうか。「生命について一緒に考えて行こう」としている大部分の生徒や教師たちにとっては冷水をかけられているようなものです。今後あらためて欲しいと思います。

従って、このテストも「暗記した量」を問うものではありません。10回の授業で説明を聞いたり、人の意見を聞いて「生命についてどれだけ深く広く考えたか」を、今の時点で自分なりにまとめて欲しい、というのがねらいです。

次の問題群から1つを選んで自分の考えをまとめてみて下さい。できるだけ授業で出された資料や説明、討議などと関連づけて書いて下さい。選択した1つの問題からははみでて他の問題に波及して行くことは、いっこうに構いません。また、プリント、ノートなど何をみても構いません。

- 別紙資料\*を参考にして、農薬使用にともなう長所・短所の両面について述べなさい。
- 羊水検査によって先天的障害児の発見、性別判定が可能になってきた。このような医療技術の発

## 総合学習の理論と実践

- 展について君の考えを述べなさい。
3. 生命の起源をどこまでさかのぼって考えることが正しいと思いますか。君の考えをまとめてみなさい。
  4. 人間の場合、生命の誕生はどこから始まると考えますか。そう考えると現実にはどういう問題点を生じますか。
  5. 肉体としての老化と精神の老化の両面について、君の考えをまとめてみなさい。
  6. ソ連のチェルノブイリ原子力発電所の事故について、君の考えていることをまとめてみなさい。
  7. 生命の誕生は偶然であると思うか、必然であると思うか。君の考えをまとめてみなさい。
  8. 生命の誕生を神の摂理として説く神話や創世紀は、非科学的でナンセンスである、という意見について、君の考えをまとめてみなさい。
  9. 動物の発情期は一年のうちに限られている。それに対して人間は発情期というものがない、いわば一年中発情しているともいえる。どうしてなのだろう。君の考えを述べなさい
  10. 人間の苦悩の身体的側面、精神的側面、そして両者のかかわりについて、君の考えをまとめてみなさい。

\*別紙資料としてベトナム戦争での枯葉剤の使用が原因とみられる二重体児（ベト君ドク君）の記事を雑誌（技術と人間）より転載したものを示す。

この10の問いは、中間テストまでになされた10回の授業についての感想や意見を聞くものであった。授業中の生徒たちの意見が、教師側の話の長いことや、あるいは難解さのために、あまり活発に出なかったこともあって、むしろ、このテストで生徒たちの反応をつかもうとしたのである。

「選択した1つの問題からはみて他の問題に波及して行くことは、いっこうに構いません」と指示してあるので、2～3のテーマに論及している生徒もいる（江崎智子、伊藤靖）。しかし13人の生徒が主に論及したテーマは、1の農薬問題が3人、2の羊水検査の問題が3人、5の老化についてが2人、8の神話・創世紀についてが1人、9の発情期についてが1人、10の苦悩の問題が2人、とくにテーマのないものが1人であった。

1の農薬問題は、ベトナム戦争の際の枯葉剤作戦の影響と殺虫剤としてのダイオキシン公害を結びつけた徳井の授業に対する意見である。3人は次のように述べている。

○「ベトナムの後遺症は、兵士たちはもちろんだが、生まれてくる子供、新しい生命にまでおよんでいる。有名なのは、資料にある、足は1組だが、腰から上

が2つある（もちろん頭も2つある）子供だ。（——もしも自分が親の立場で、生まれた子がこのような奇形児ならどうするか、というアンケートがあったが、自分ならどうするだろう。おそらく殺してしまうのかもしれない。だが、生かしてあげたいと思う気持ちもある。でも、結局それが本人の為になるかどうかよりも、親の強さの問題ではなかろうか。世間の人々の目に耐えられるかどうか。——）はっきり言って、そんな子供を見ると、かわいそう、よりも恐ろしい、気持ち悪い、になってしまう。しかしこれが現実であり、農薬の、戦争の恐ろしさだから、目をつむる訳にはいかない。」（藤村洋介）

○「野菜に虫がつかないように農薬をまく、家に白アリがくると農薬をまく。（中略）しかし、農薬の長所とは、人の命を無視してまでも長所でありうるのか？私はそれが疑問である。私は人間の作ったもので人間が、苦しんでいるような気がする。人間は人間を滅するために生きているのではないはずだ。」（中原千佳）

○「僕が一番、心に残っているのは（毎回の授業が、それなりに、頭に焼きついているのだけれども、あえて）農薬使用についてです。少しだけ、VTRを見せていただきましたが、あそこ出演していた旧兵士達だけでなく、その子供まで影響を受けてしまうということは、大変に恐ろしいことです。実際、それを使った方も、その本当の恐怖を知らずにいたため、今となってその影響を受けている自分に気付き、おののいているわけです。これも大きく言えば戦争における産物ですが、それによって、自分達は希望していないのに、不幸にも、普通でない体で、生まれてしまった子供達を、だれがどうやってなぐさめ、あやまればいいのだろう？」（伊藤靖）

2の羊水検査による先天的障害児の発見等の医療技術の発展にともなう問題については、三橋の授業であったが、これに答えたものは、以下の女子3名であった。

○「先天的障害児の子が、自然の摂理として生まれてくる前に亡くなるなら、これはやっぱりそっとして摂理に従った方がいいと思うけど、無理に殺したり、生かしたりするのはどうかと思う。結局のところ、私にはわからない。本当に生かしておく事がその子にとって幸せなのか？また親にとって幸せなのか？（中略）科学が発達するのは賛成だけど、自然にともなった科学であってほしいと思う。医療技術ってなんとなく自然を無視した所があると思う。医療技術の発達はうれしいものだと思う……病気をなおりたりしてくれるから。でもある程度の限界を越えてはならないとも思います。」（江崎智子）

○「羊水検査による先天的障害児、性別判定が可能に

- なって、それを行うということについては、私は賛成です。（中略）自分の子供がもし障害児だとわかったら、私はその子供を生みません。その子供に申し訳ないし、『どんな子供でも自分の子に変わりはない』という気持ちはもちろんあります。でも、今の世の中の感じから言って、やっぱり白い目でみられるし、差別されるし、子供だけでなく、なんか自分までみじめになりそうで……。（中略）自分の子供は、障害児であって欲しくない。だから障害児とわかれば生まないとと思う。それに何よりもその子供にとっても、そちらの方が良いと思う。」（中田陽子）
- 「医学はどんどん発達している。私たちはそのおかげでどんなに助かっているかしれない。自分を含め、自分の周囲の人々が病気にかかった時、現代の医療技術に感謝せずにはいられないのだ。しかし、ふと、これは間違っているのではないか、と思われる時もある。ニュースで植物人間や人工受精について聞いた時、ただ治療を受けるために生きているだけのような人々を見た時、そしてこの間、授業で赤ちゃんの性別、身体の異常がおなかにいる時からわかるようになったと聞いた時。このような時、医療とはなんのためのものかわからなくなる。あまり自然に逆らうのはこわい気がする。」（大貫愛）
- 中田がやや迷いながらも、羊水検査による生み分けに肯定的であるのに対して、江崎と大貫は、『自然の摂理』や『自然』という立場から疑問を呈している。これは三橋による授業の際も論議された点であり、生み分けが親のエゴであり、生まれてくる者の『生まれる権利』をつみ取ることにならないか、という点が問題となった。
- 5の老化というテーマは、石川がとりあげたテーマであったが、これについては2人の生徒が論及している。
- 「むかしから『不死の薬』、『永遠の若さ』などを求めて行く物語が多くある。全人間のねがいは老化からの逃避なのである。今、18才の私であるが、早くも、老化のおそれを感じる時がある。しかし、現実としては、老化イコール死とは、考えてはいないだろう。死のきょうふとしては、若い自分には別問題なのである。だから核戦争や殺人からの死のきょうふと、老化からくる死のきょうふとは、まだ同じには思えていないのです。」（市川和己）
- 「60歳ぐらいの人が、『私はもう歳だから』っておもったらだめじゃないかなあー。まあ、ようは気のもちようだと思う。精神的には。でも精神面での老化なんて、お医者にもわからないんじゃないかなあー。でも、肉体的に老化はじめちゃうとなんとなーく精神的にも老化しちゃうのが現実じゃないで

しょうか？老化なんてまだ今の私には、遠い先のことだから、よくわからないけど。」（加藤美穂）

8の神話や創世紀にみる生命の誕生というテーマは田中がとりあげたものであったが、これについては1人が論及している。

○「私もはじめは、神話を見た時、『こんなわけないのに』とか『バカげている』とか思った。しかしづつと読んでいくうちにこの神話が生まれた頃の古代ギリシアの人々の想像力の豊かさとそして神に対する人々の夢などがわかってきて感動した。」（後藤悦子）

9の発情期の問題は、川合が『生命の誕生と成長について』の中でふれたことであり、人間と動物における性のもつ意味の相違について考えることがネライであったのだが、このテーマをとり上げた生徒は、発情を欲求一般と混同し、次のような見解を述べた。

○「私たち人間は、言葉を使ってしゃべるし、想像力はあるし、火を使って生活するし……と、動物とのちがいをあげればきりがないが、このことがどうして、一年中発情期といえるのか。それは、発情イコール欲求と私は考えたからです。こう考えれば、一年中発情期で一年中欲求不満と仮定してもよいではないでしょうか。（中略）毎日欲求しているということは、毎日発情している、つまり一年中発情期ということになると思う。」（真城美恵）

10の『人間の苦悩』についてのテーマは、2人の生徒が論及している。

○「人間は誰もが苦悩とまでは行かなくとも、必ず何か思い悩んでいるものだと思う。『人は悩むことで大人になるんだ。』という言葉をよくきくが、まさにそのとおりであろう。事実ぼく自身、他人から見ればあまり変化が無いのかもしれないが、そうすることで、ずいぶん考え方というものが変わった。（中略）あまり書くことないので、今まで自分が考えてきたことを書きたいと思う。ぼくの変化を自分で考える意味も含めて。」として、中学校時代の人間不信について、『人間が社会という名の機械を構成する一部品として成型されてゆく』ことについて、高校時代の恋愛と自分のわがままについての反省へと書きすすんでいる。（奥村雅一）

○「最近のニュースでは自殺の事がいろいろ話題になっているけれども、実際去年よりも大分増えている様です。自殺するのもすごく勇気がいる事だと思うけど、やっぱり精神的に追いつめられないと自殺は出来ないんじゃないでしょうか。」（千葉哲子）

特にテーマを限定せず、「生命について」としてエッセイ風に感想を書いた生徒が1人いた。その日の登校途中、雨にぬれた路上にカタツムリを見つけたところから書き出している。

○「ぼくはその時幼い遊び心がはたらいたのだろうかあるいは勉強疲れ（そんなにしてないが）のうっぷんばらしであったのだろうか，“つん”と指先でつづいて見た。するとただへばりついていただけの生きているのか死んでいるのかわからぬようなカタツムリは、きちんとぼくの行動に反応し、目や頭をひっこませてくれた。無性にうれしかった。」これを彼はカタツムリとの“交流”と呼び、「人間は一人では生きてゆけないかもしれないけど、もし一人と一匹（一匹ではなんだかカタツムリに失礼な気がする）ならば、生きてゆけるのではないか」として、生命と生命の出会いの感動を述べている。その後、筆先是いっしんし、インダス文明滅亡の原因として自然林の伐採、砂漠化を指摘し、その背後に、“自然への感謝、大自然への感動そして恐威（脅威のこと）”が欠けていたからだと言う。そして今日、アマゾンのジャングルの破壊に見るよう、人間は同じ過ちを繰り返そうとしており、「生命は自然であり、自然是生命である」という大きな構想を打ち出している。（筑尾彰範）

以上、1学期の中間テストとして課された小論文形式の問い合わせに対する解答を全員（13人）分抄録してみた。各自、自分の意見が述べやすいものを選択したのであろうが、2学期以後において自分の研究テーマとして選択したものとの対応関係はあまり見られない。10の“人間の苦悩”を選択した2人が直結しているだけである。しかしながら、自分史をここでも書き、最後のレポートまで結局そこから抜け出られなかった奥村雅一の場合、いわゆる大人社会への不信、学校不信を正直に表明しながら、学問や科学一般も不信の対象とされ、“思って学ばざれば則ち殆うし”そのもので、單なる主観的な“思い”にとどまってしまった。“心の悩み”をとりあげることになる千葉哲子の場合も、ここでは主に自殺のことを論じており、自己の研究テーマとの連続性が強いとは言い難い。

「生命について」の教師側が用意したテーマが出揃う前での中間テストであるから、生徒たちがその後、研究テーマとして選んで行くものとの対応関係があまり見られないのはやむを得ないとは言えよう。しかしながら、テーマとしては対応していないても、江崎智子の場合、医療技術の発展をとらえた視点として“自然”概念をすでに打ち出している。これは、彼女が自然破壊の一つとしての酸性雨や地下水汚染に取り組むことを促した視点であると言えよう。また老化のことを論じた市川和己は、“死に向かう存在”としての人間の老化と戦争や殺人を対比させる視点を持っていたが、殺人の中での生命観を考えようとした彼の姿勢はその後のテーマ決定にもつながって行く。また、

「生命は自然であり、自然は生命である」と述べた筑尾彰範の場合も、江崎智子と同じく、「人間の営みと自然破壊」というテーマを選び、放射能の影響を調べることになる。彼は総合学習の第2回目の授業の時から、「漫画家になるための広い視野が欲しいから」と述べており（本校紀要前号、P13）、“生命と自然”について常に幅広い興味と関心を見せていましたと言える。

## 2. 一学期期末テストについて

1学期の期末テストは、教師側が用意した16のテーマについての授業が終了した7月3日に実施された。内容は以下の通りであるが、Iは、中間テスト以後の授業についての感想や意見を聞くものであり、IIは、自分の研究テーマの決定、研究計画を簡単に書かせようとしたものである。

I. 次の事項を説明し、それに関連している事柄にも言及しなさい。（2つを選ぶ）

- |           |       |
|-----------|-------|
| ①レクリエーション | ②ハレとケ |
| ③労働の疎外    | ④産児制限 |
| ⑤過剰栄養摂取   | ⑥脳死   |

II. 下のテーマ群から今後調査研究するものを選びそれをどのように追求していくのかその計画などを述べよ。

- |            |             |
|------------|-------------|
| ①生命の誕生・進化  | ②遺伝子操作      |
| ③成長・老化     | ④脳死と臓器移植    |
| ⑤生命と核エネルギー | ⑥労働の疎外      |
| ⑦心の悩み      | ⑧生命の思想史     |
| ⑨自殺と殺人     | ⑩遊び         |
| ⑪食糧問題と人口問題 | ⑫ことば        |
| ⑬生命のリズム    | ⑭人間の営みと自然破壊 |

<テーマ>

<それを選んだ理由>

<計画>

III. 今後の授業のすすめ方についての意見を裏に書きなさい。

Iの中間テスト以後の授業のテーマないしはそこで取り上げられた問題について、2つ選んで答える問い合わせに対して、生徒達（1名欠席したため12名）は次の順序で選択している。

- 脳死（⑥）……… 9名
- レクリエーション（①）……… 4名
- 産児制限（④）……… 4名
- 過剰栄養摂取（⑤）……… 3名

- ・労働の疎外（③）……………2名
- ・ハレとケ（②）……………1名

脳死はタイムリーな問題であり、最も多くの生徒が論及しているのだが、自分の研究テーマとして選択した者は皆無であったこととどう関係しているのだろうか。「私は脳死は死とみとめる考え方には賛成である」と断定的なのは市川和己のみで、他は、「家族の者たちにとってその人は肉体だけでも生かしておきたいと思うだろうが、本人の意志はわからない。（中略）少しでも長生きするのは大切だけど、それがもとで他の人にめいわくがかかるのはいけないと思うが、これは金持ち社会だけの事ではないかと思う」（江崎智子）、「私はいくら心臓が動いていても脳が動かないのなら、人間として“死んでいる”じゃないかと思う。はっきりと言い切れないが。」（大貫愛）と迷い、疑問を呈している方が多い。医学や法律学など専門的立場からの知識を必要とし、なおかつ論争的なテーマだけに、自分の研究テーマとする迄には至らなかったのであろうと思われる。脳死と植物人間との違い、脳死と臓器移植（とくに心臓・腎臓移植）、筑波大事件、「生命の質（The Quality of Life）をめぐる問題など、このテーマについての奥行きの深さを示めすことの出来なかつた我々教師側の問題も指摘できるだろう。

「労働の疎外」は、生徒たちがチャップリンの『モダン・タイムズ』に示した興味の割には、取り上げた生徒が少なかった。レクリエーションと結びつけると論じやすいはずだが、①と③を結びつけたのは藤村洋介だけであった。

「僕はレポートの中では、仕事をしている時に生き生きする方がより人間的ではないかと思ったわけだ。しかし、田中先生の意見をまとめて考えてみると、その昔、人間の仕事はイコール遊びであったらしい。石器の時代に、人々は生活のための営みを、仕事と思ってやっていたはずはない。だから、遊びと仕事も区別がなかったわけだ。すると、より人間的なのは、遊びとも仕事とも言える、両方にまたがっている時ではなかろうか、と思った。」

労働は生産的であり、遊びは生産的ではないとするところにレクリエーション論（労働のための再創造！）があるとすれば、そういうレクリエーションは労働における人間疎外の補完物にすぎなくなる。労働における自己実現とは何か、遊びにみられる楽しさや共同性の労働の場における復権は、如何にすれば可能かという視点からこのテーマを発展させることができる。

④の産児制限と⑤の過剰栄養摂取は、人口問題・食糧問題のテーマの中でとりあげられた問題であった。しかしながら、この2つを同時にとり上げたものはいなかった。2学期の自主研究のテーマとして、食糧問

題を扱うことになる伊藤靖は、このテストでは、⑤の過剰栄養摂取については、次のように論じている。

- 「・先進国と発展途上国では、栄養摂取量の差が2～3倍ある。
- ・飢餓に悩まされている国では、人間として最低限必要な栄養もとっていない。
- ・日本でも、食べ残り、過剰生産によるあまりを簡単に、捨ててしまうことがある。そういうのだけでも、発展途上国に送るシステムがあればどんなに喜んでもらえるだろう。（以下略）」

江崎智子の場合は④の中で、食糧問題にも論及している。「食糧問題を防ぐのにはそれを食べないようにする為、人を少なくしなくてはならないのはわかるけど、産児制限をしたら子供の好きな家族がかわいそう」と感情的レベルでとらえ、授業中に問題とされた産児制限の歴史的背景（「産めよ、増やせよ」などの政策）や先進国による強制（新マルサス主義）というレベルで問題がとらえられていない。このことは④産児制限をとりあげた他の3人も同様である。

「発展途上国の人口急増は、まさにレミングの自殺行進の前ぶれで、このままでは今後さらに大多数の人が死に絶えるだろう。」（筑尾彰範）

「たしかに、あまり国という大きな単位でみると、産児制限も、やむを得ない気もするが、個人の単位でみると、みんな兄弟もいとこもないんだーと思うと、1人1人のためには、決してよくないと思う。」（大貫愛）

「現在、出産前に男か女、きけいじかどうかなどがわかってしまう。それで産む産まないを決めてしまっている。だが出産前に、人間の命を親のはんだんできめてよいのか。」（加藤美穂）——この生徒の場合は、問題を誤解している。

②のハレとケというテーマは、人間の生と死が、共同体的慣行の中でどのように位置づけられてきたかを考えようとしたものであるが、生徒にはその意義が充分には理解されなかったようだ。ただ一人とり上げた中原千佳にしても、「昔からの習慣？田舎などで残っているもの？よく分からぬ。私にはハレとかケとか、『それがどうしたのか？』が全く分からぬ。」と述べ、授業者（田中）の一人相撲に終っていたようだ。

IIの「今後調査研究するもの」のアンケートについては、この段階では各自つぎのように述べていた。

○藤村洋介「⑧生命の思想史——まだテーマもはっきりしていないけど、宗教のところで生命の思想史などをやってみたいと思っている。（仏教とかキリスト教あたりで）」

○江崎智子「⑩+④や⑤など——人間の手でどれくらいの人工的なことが増えたか。またそれは自然を壊

していないだろうか。自然破壊によってどれだけ自然が大切なのか、また影響をうけているのか。(それらの)疑問から、本で調べたり、人の意見をきいたり(特に科学者)、またこれでいいのかという反論の声をもとにして、自然の大切さを、自分でも他の人にでも理解できるようにして、生命の他のテーマとのつながりも調べられたらいいな……と思います。」

○中田陽子「⑩遊び——人によって”あそび”とはどんなものであるか。」

○中原千佳「⑫ことば——ことばとは、私たちにどんな影響をもつのか? ことばがないと私たちはどうなるのか? など、ことばのあり方ではなく、人間の中の“ことば”を研究したい。」

○筑尾彰範「⑭人間の営みと自然破壊——これまで人類の行ってきた自然破壊とそれによる自然のしつべ返し、あるいは生態系へ及ぼした影響を調べあげる。(ほとんどヒマがないけど)」

○真城美恵「⑦心の悩み——子供、青年、中年などの年代にわけて、それぞれの時代にはどういう悩みがあるのか、身近な人にきいてみる。」

○市川和己「⑦ or ⑨まだきまりません——?」

○伊藤靖「⑩か⑪——まだよく決まってないけど、関連する本などを調べてまとめる。」

○奥村雅一「⑦心の悩み——なぜ人は悩むのか? (原因) 悩むということの定義→結果としてどうなるか。多種多様な例をあげる。→その後、人はどうしていけばよいのか? (発展) 社会的にみて、機構が間違っていることが証明できればと思う。」

○大貫愛「⑫ことば——図書館にいってしらべる。」

○加藤美穂「⑩遊び——急にこれから計画はと言わてもまだ何も考えていない。でも昔と今の違いについてとか……それがどんな問題をおこすとか……だと思います。」

○千葉哲子「⑦心の悩み——まだわからない。」

当日欠席の後藤悦子を除いて、12人の生徒たちが各自のテーマ決定の段階でどの程度の認識であったのかが如実に示されている。この段階でははっきり決まっていたなかった市川、伊藤は、その後、市川が⑨の自殺と殺人に、伊藤が⑪食糧問題と人口問題にテーマを決定した。また、加藤は⑦の心の悩みに変更した。後藤悦子も心の悩みに決定した。

### 3. 二学期期末テスト

2学期の中間テストの時点では、まだ各自の調査研究の段階だったので、中間テスト終了後から始まる発表にそなえてレポートを提出させただけであった。

10月末から発表が開始され、12月4日の期末テストの時点では、9名の発表が終了していた。期末テスト

の内容は、以下に示すが、I.自分の発表に関しての反省と、II.終了した9人の発表についての意見、III.アンケートからなっていた。

#### 高3総合学習 第2学期期末テスト

2学期は各自の自主的な研究と発表を中心とした授業を行ってきました。あと4人の発表を残していますが、今までの発表のまとめと反省の意味で次の各質問に答えなさい。

I. 自分の発表に関して次の事項に答えなさい。

(1)特に言いたかったこと(言いたいこと)はなにか?

(2)そのことは生徒・先生に理解された(される)と思いますか?あまり理解されなかつた(理解されそうもない)とするならば、その原因はなんだろうか?

(3)[発表のすでに終わった人だけ]生徒や先生の意見や質問を聞いて、現在、反省していること。

(4)自分のテーマと全体テーマ「生命について」とのかかわりについて、今はどのように考えているか。

II. 今までに終了した9人の発表について、簡単に感想なり意見なりを述べなさい(自分の分については省略)。

(1)後藤レポート“心の悩み——中高年の心理——”

(2)真城レポート“心の悩み——幼年期——”

(3)千葉レポート“悩みについて”

(4)奥村レポート“心について自分が思うこと”

(5)市川レポート“自殺と殺人”

(6)加藤レポート“自殺について”

(7)筑尾レポート“人間の営みと自然破壊——放射能を中心に——”

(8)江崎レポート“人間の営みと自然破壊——大気と地下水の汚染——”

(9)藤村レポート“生命の思想史——ソクラテスとリスト——”

III. 4月からの総合学習の時間を思い出して、次のアンケートに答えなさい。自分の意見にもっとも近い番号に○を付けなさい。

	そ う 思 う	と ち 賛 成 か と う	ど ち ら と も い え	ど ち ら と も い え	ど ち 反 対 か と う	そ う は 思 わ な い
① 1学期の先生達の話は難かし過ぎた。	5	4	3	2	1	
② 1学期の先生達の話はあまり役立たなかった。	5	4	3	2	1	
③ 1学期の先生達の話は面白かった。	5	4	3	2	1	
④ 先生の話から始めるよりも、最初から各自がテーマを決めて自主研究をした方が良い。	5	4	3	2	1	
⑤ 1学期は、それぞれのテーマについて討論を中心として各自の関心を深めた方が良い。	5	4	3	2	1	
⑥ テストの解答を全部印刷されたのには困った。	5	4	3	2	1	
⑦ 夏休みにもう少し自分のテーマについての研究をやっておくべきだった。	5	4	3	2	1	
⑧ 図書館での自主研究の時間は有効に使えた。	5	4	3	2	1	
⑨ 図書館での自主研究の時間にも、もう少し適切な先生の指導・助言が欲しかった。	5	4	3	2	1	
⑩ 図書館での自主研究の時間はダレてしまいムダだったようだ。	5	4	3	2	1	
⑪ 図書館での自主研究の時間は、おしゃべりが多くて困った。	5	4	3	2	1	
⑫ 自分の発表には、十分な準備で臨めた(臨める)。	5	4	3	2	1	
⑬ 自分の発表にはあまり自信がないが、受験生の身としては仕方ない。	5	4	3	2	1	
⑭ 発表になってからは、みんなひとつの発表をよく聞いていたと思う。	5	4	3	2	1	
⑮ 発表の仕方にもう少し工夫が欲しかった。	5	4	3	2	1	
⑯ 司会は先生がやって欲しい。	5	4	3	2	1	
⑰ こんな試験ならないほうが良い。レポートにすべきだ。	5	4	3	2	1	

次に、このテストに書かれたことを下にして、9人の発表の自己反省と、他の人達の意見を簡単に紹介したい。

(1) 後藤レポート“心の悩み……中高年の心理……”

・本人の反省

「自分でも難しくてよくわからなかった。もっと別のテーマでやればよかった。」——Iの(1)

「自分のテーマは中高年の悩みだから充分、関係があると思っている。」——Iの(4)

・感想

「中高年というあんまり興味ない年代をあつかつたのだから、もうすこしおもしろく興味をもたせてくれるとよかったです。」(藤村洋介)

「おくむらクンの“つっこみ”が印象的でした。

プリントも読みやすくてよかったです。」  
(中田陽子)

「親や老人にも悩みがあるんだと実感。おばあさんになったら、もう一度、えっちゃんのレポートよみなおそー!!」(加藤美穂)

(2) 真城レポート“心の悩み……幼年期……”

・本人の反省

「“幼児に心の悩みはない”という事」——Iの(1)  
「私の言いたかった事がうまく伝わらず、あやふやに終わってしまった残念だ。先生方がおっしゃった私のレポートについての感想の中で、私が“まちがった解釈をしている”と思うところを指的(ママ)できなかった。」——Iの(3)

[注] この生徒は、3学期の最終レポートでは、乳児期(1才後半ぐらいまで)と幼児期(6才ぐらいまで)とを区別し、乳児については「こころの悩み」はない、幼児については、このころから「悩み」が生じる、として、「幼児に心の悩みがない、というのは正確かどうか」という質問に答えようとしている。

・感想

「わかりやすくてよかったです。いつも真城はあそんでいたので絶対できないと思っていたので感心した。」(後藤悦子)

(3) 千葉レポート“悩みについて”

・本人の反省

「年をとるにつれて、想像力がなくなり、生活のはりもなくなりがちで、悩みも自分の劣後(ママ)に向かられる(という方向にいってしまった。)」——Iの(4)

「生きているかぎり悩みはつきまとう。」——Iの(4)

・感想

「決して人間から離れられないものだと思った。でもそれによってやさしさ、いたわりが生まれるといいなと思った。」(江崎智子)

「悩みが年代別にきてたから、青年期についてのみやればよかったと思う。(後藤、真城、千葉で「悩み」三部作)」(藤村洋介)

(4) 奥村レポート“心について自分が思うこと”

・本人の反省

「心というものをもっともっと大切にしてほしいということ。」——Iの(1)

「あまり理解されたとは思わない。それは多分にぼくの一人よがりな面があるからだろう。」——Iの(2)

「裏づけのしっかりした発表(自分の意見が当然主体)にすべきだった。」——Iの(3)

「人間にとて生命についてとは永遠のテーマであるべきであると思う。今の教育にそういうものを取り入れなければと思う。」——I の(4)

・感 想

「奥村君は真剣に心について考えていると思ったけれどこだわりすぎじゃないかなと思った。もっと楽に考えた方がいいと思う。」（江崎智子）

「自分の意見ばっかりで、おもしろかった。調べたことよりも人の意見を聞いている方がたのしい。」（中原千佳）

「自分の思ったことだけ言うのはナンセンスだ。ユニークな考えを持っているのはいいけど、自分の今の状態にひねくれてるだけじゃないか。それを発表すんな、といいたい。」（筑尾彰範）

「ある固定観念を持っているらしいが、それを反対の立場やまわりから見る立場になって見つめなおすことができるともっとよかったです。」（伊藤靖）

この発表については、評価も両極端に分かれている。男子が、「ナンセンスだ」「ある固定観念」等否定的であるのに対して、女子が、「あれだけ自分の考えを言いきったためいい発表の時間になった。」（大貫愛）という意見を初めとして、比較的好意的にとらえようとしている。期待度、日頃の人間関係などの反映なのかもしれない。

(5) 市川レポート “自殺と殺人”

・本人の反省

「正直言って、そういう事は何もなかった。ただ義務として、事務的にのべただけ。この授業を受け身にたってうける人には何もないが、積極的に受ける人には、言いたかったことも多くあるだろう。」——I の(1)

・感 想

「パターンをふやして普遍性、一般的に述べてほしかった。（足りなかつたんだろう、きっと時間が）」（藤村洋介）

「映画のヒーローによる大量殺人は犯罪にはならない。悪い奴を、バッタバッタとやっつける時、それを見る人は正義を感じるが、人を殺しているということは頭にないんじゃないかな、これは恐ろしことだ。」（伊藤靖）

(6) 加藤レポート “自殺について”

・本人の反省

「1.岡田有希子さんの死の真相、2.命の尊さ」——I の(1)

「2.はわかつてくれたと思うけど、1.のことはやはり他人事なので、興味半分ってとこかなあ。」——I の(2)

・感 想

「芸能人のことを例にあげていて、私たちはわりとミーハーなので真剣に聞いていた人が多かった。」（真城美恵）

「心理面を細かくするとよかったです。」（奥村雅一）

(7) 筑尾レポート “人間の営みと自然破壊……放射能を中心に……”

・本人の反省

「文明の進歩、人間と自然の矛盾について」——I の(1)

「テーマ自体が大きすぎるし、誰にも分からぬ問題だから。まわりにいっぱいいてんちょうした!!」——I の(2)

「生命、自然を大切にしたい。でもこんなことをいつも考えていたら生活できない。でも考えないと破滅すると思う。」——I の(4)

・感 想

「今、最も問題にされている核について、客観的なところと主観的なところが両面あって、よかったです。でも、彼の考え方はかたよりすぎだ！」（中原千佳）

「すばらしい。ごくろうさまといってやりたい。自分なら、あんな人の前で上手にやれないだろう。」（市川和己）

[注] この発表は、中等教育研究協議会の公開授業の中で行なわれた。

(8) 江崎レポート “人間の営みと自然破壊……大気と地下水の汚染”

・本人の反省

「“自然の警告”ということ。人間が手を下せばそれなりに反動が来る。がそれは悪い方ばかりでない。人がうまく自然をいたわってやれば、恐ろしい公害もおこらない。人が人だけのために汚染をともなう活動をすれば、それ以上のものが返ってくる事を知ってほしい。現に今目に見えない所で、だんだんそれがあらわれている。」——I の(1)

「自分でいろいろ知ったつもりになったけど、実はまだ知らない事があるのではないか。あと汚染をやめるようにした時に今の生活ができるかどうか。」——I の(3)

・感 想

「多くのレポートがまとめてあってよかったです。もうすこし簡潔にしたらもっとよかったです。」（市川和己）

「よく調べてあり感心した。少し私には難しかったが。でもどんなことについても問題意識（マ

マ) をもつということは私に必要だし大切なことで、この総合学習の時間は“問題ティギ”（ママ）の場として役立つ。自分でいろいろ問題にとり込んでいくのは大変だけど、みんなの発表によって、いろんなことに目が向けられる。」（大貫愛）

(9) 藤村レポート“生命の思想史……ソクラテスとキリスト……”

・本人の反省

「物質の豊かさとは逆に心の豊かさが問われる今日このごろにおいて、哲学的思想にふれることを1つの目標にした。問題提起がなければ、日頃考えないであろうという死についても、各人に考えてほしかった。と同時に、先生にも。」――Iの(1)

「もう少しあわかりやすく、自分の言葉・意見を使っ

て発表すればよかった、と思う。（興味ぶかくきけるのが一番）――Iの(3)

・感想

「難かしかった。ちょっと題からしてやりにくいく思う。プリントをよんでいたら頭が混乱してしまった。」（後藤悦子）

「テーマがしばられているわりには掘り下げがたりない気がした。」（奥村雅一）

本来なら、授業記録をのせれば授業の実際・実態はより正確に伝えることが出来るのであろう。しかしながら、授業記録をとった授業はひとつもなかった。言い訳にすぎないが、以上の生徒たちの反省、感想から想像していただく他はない。もう一つ参考資料となるものは、同時に実施したアンケート（Ⅲ）の結果であろう。

III. 4月からの総合学習の時間を思い出して、次のアンケートに答えなさい。自分の意見にもっとも近い番号に○を付けなさい。

	そう思ふ	どちらかといふ	どちらともいえ	どちらかといふ	どちらかといふ	そうは思わない
① 1学期の先生達の話は難かし過ぎた。	1	1	5	2	4	
② 1学期の先生達の話はあまり役立たなかった。	1	4	2	2	4	
③ 1学期の先生達の話は面白かった。	1	4	5	3	0	
④ 先生の話から始めるよりも、最初から各自がテーマを決めて自主研究をしたほうが良い。	0	1	6	3	3	
⑤ 1学期は、それぞれのテーマについて討論を中心として各自の関心を深めたほうが良い。	4	4	3	1	1	
⑥ テストの解答を全部印刷されたのには困った。	7	2	4	0	0	
⑦ 夏休みにもう少し自分のテーマについての研究をやっておくべきだった。	3	0	4	1	5	
⑧ 図書館での自主研究の時間は有効に使えた。	1	3	2	3	4	
⑨ 図書館での自主研究の時間にも、もう少し適切な先生の指導・助言が欲しかった。	1	2	3	1	6	
⑩ 図書館での自主研究の時間はダレてしまいムダだったようだ。	1	2	7	2	1	
⑪ 図書館での自主研究の時間は、おしゃべりが多くて困った。	1	1	4	2	5	
⑫ 自分の発表には、十分な準備で臨めた（臨める）。	1	2	3	3	4	
⑬ 自分の発表にはあまり自信がないが、受験生の身としては仕方がない。	3	2	5	0	3	
⑭ 発表になってからは、みんなひとの発表をよく聞いていたと思う。	5	5	2	1	0	
⑮ 発表の仕方にもう少し工夫が欲しかった。	4	3	3	3	0	
⑯ 司会は先生がやって欲しい。	0	1	4	1	7	
⑰ こんな試験ならないほうが良い。レポートにすべきだ。	6	0	4	1	1	

無記入1

①から⑤の問いは、1学期の授業に関するものであったが、①～③の答えをみると、教師による授業については、比較的受容的であると言える。④についても同じ傾向なのだが、⑤の「討論を中心とした授業」展開については、反対の結果が出ている。これは矛盾すると言えるのだろうか。⑤に対して「そう思う」と答えた4人について、④の答えを見てみると、奥村雅一だけが「どちらかというと賛成」、あとの3人（筑尾、後藤、伊藤靖）は「どちらともいえない」以下に1人ずつ分布している。奥村だけが、どちらかというとあくまでも生徒主導型の授業展開を期待していたということであり、他の多くは、最初は教師による授業、動機づけもやむをえない、ただし、生徒は聞き手にとどまるのではなく、個々のテーマについても討論の時間が欲しい、ということなのであろう。

⑥の1学期中間テストの印刷については、点数化をしていないだけに、討論の素材に、というつもりで印刷し配布したのであるが、9人の生徒が「困った」という意志表示。こういうことを実施する時は、ある程度慎重に、という反省をもった。

⑦から⑪の問いは、自分のテーマについての自主研究に関するものである。⑦の夏休み中の作業については、「そう思う」ものと「そうは思わない」ものとに分裂している。「そうは思わない」＝夏休みにまでやる必要はないという意見の5人の中には、市川和己もいるが、自分の発表についても、既にふれたように「義務として、事務的にのべただけ」と書いている。この問い合わせても、わざわざ「一年生、二年生ならわかるが、三年生という時期を考えなければならない。理想はあくまで理想だと思います」と付記している。本音を率直に表現しており、考えさせられる。だからこそ、図書館での自主研究の時間を合計7時間保障してあげたのだが、⑧の問い合わせて、「そうは思わない」4名、「どちらかというと反対」3名というのも寂しい。これはかなり実態を反映した数字であり、7時間の自主研究の時間を本当に有効に使っていたと言えるのは3、4名に過ぎなかった。

⑫から⑯の問い合わせ、発表授業に関するものだが、⑬の問い合わせ⑦に対する答えとほぼ対応しており、「そう思う」の3名はいずれも男子（筑尾、市川、伊藤）であった。⑯の司会については、7名が生徒たちによる司会を主張している訳だが、慣れるに従って、生徒たちも単なる議事進行役から、討論の火つけ役、まとめ役としての司会の重要さ、難しさに気づき、このような結果が出ているのだと思う。

#### 4. 三学期学年末テスト

今までのテストも、テストらしいテストは、1学期

の期末テストのみで、他は授業についての感想・意見とアンケートであった。従って、評価の材料としてテストが用いられたというよりも、評価は、発表内容、討論への参加などの平常点でつけられた。（評価の方法、問題点については次章、徳井論文参照）

今回のテストも、「最終アンケート」として、残りの4つのレポートについての感想と、ワープロ実習等についてたずねた。

#### 高3総合学習 最終アンケート

高3( ) ( )番( )

「生命について」一年間ともに考え、学んできました。授業である以上、四月のスタート時よりも、みんなの生命についての認識や問題関心がいちだんと深まっていて欲しいものだと思いますが、正直言ってあまり自信がありません。テーマの設定、授業の仕方、個別研究の仕方・指導のあり方など、教師グループとしても反省することが山ほどあるのですが、みんなへの数回のアンケート、授業中に言ってくれた要望・意見などを参考にして来年度の総合学習は、さらに充実したものになるよう頑張りたいと思います。一年間ご苦労さまでした。

みんなが自分の「夢」の実現のために、希望の進路に到達できることを、私達も全員で祈りたいと思います。御卒業後も、「総合学習」の第一期生として、「総合学習」はその後どうなっているのかとか、「生命について」今、こんなことを考えているとか、話に来てください。御健闘を祈ります。

1987. 1.29 総合学習の研究グループ一同

安藤富美子・石川 久美・梶原 修・川合 勇治  
桜井 幸子・田中 裕巳・徳井 輝雄・長谷川 弘  
三橋 一夫・安田 知加

I. 最後の4人の発表について簡単に感想なり意見なりを述べて下さい（自分の分については反省を）。

- (1) 中田レポート“あそび”(12.9)
- (2) 伊藤レポート“日本の食糧問題”(12.15)
- (3) 中原レポート“ことばについて”(12.16)
- (4) 大貫レポート“脳の男女差について”(1.12)

II. 次のことについて簡単に意見を述べてください。

- (1) 2回ばかりワープロを実習したこと
- (2) 総合学習の報告集の作成
- (3) 来年度の総合学習に望むこと。

I. 4人の発表について

(1) 中田レポート“あそび”

・本人の反省

「あれやろう、これやろうって考えてるだけでなかなか実行できなくておまけに“生命”との関

係もよくわからなくなってしまった、だめだった。

でも自分じゃけっこうがんばったんじゃない  
かって思います。」

・感 想

「他のテーマについてもそうだが、生命とかか  
わりあいが、今ひとつピンとこないテーマであ  
る。が発表は、アンケートを駆使した形が、ポ  
イント高し。中田はなかなかやると思う。」  
(藤村洋介)

「発表した事についてはおもしろかったし、いろ  
んな過ごし方がある事がわかったけど、遊ぶの  
は調べたり考えたりする対象ではないのではな  
いだろうかと思った。」(千葉哲子)

(2) 伊藤レポート “日本の食糧問題”

・本人の反省

「くわしく調べたのはよかったと思うけど、発表  
としては、難しい内容で、みんなの関心を引く  
内容にして討論をしやすくした方がモアベター  
だと思う。

ほとんど上の空で、眠っている子もいて、こ  
りゃダメだなと思った。」

・感 想

「分かりやすく、全体の中で一番よかったのでは  
ないか」(奥村雅一)

「“おせち料理”は輸入品ばかりと新聞で読んだこ  
とがあるが、日本の食糧の自給率はとても低い。  
これから日本にとってどうすべきか、とても  
興味のあるレポートでした!!」(中原千佳)

(3) 中原レポート “ことばについて”

・本人の反省

コメントなし

・感 想

「失語症の子のことがよかった。でも、もっとそ  
の先どーなったかってここまで知りたかった。」  
(加藤美穂)

「ことばというのは、人間の体の1部分みたいな  
ものだと思いました。それがなくても生きてい  
けるけど（声は出せなくても）ことば（伝達）  
は不可欠なんだと思いました。」(江崎智子)

(4) 大貫レポート “脳の男女差について”

・本人の反省

コメントなし

・感 想

「人間の脳に左、右で作用が違うとは知らなかっ  
たのでおどろき！ 愛ちゃん、ちゃんと中間報  
告だすように。」(加藤美穂)

「彼女が女性であるからしかたがないが、女性の  
方がすぐれているといいたげに思えたので腹が

たった。」(奥村雅一)

II. (1) 2回ばかりワープロを実習したことについて

1月末の2回、教官室に置かれている4台のワー  
ープロ（NEC, 8Nが2台, 5Vが2台）を用いて、  
「報告書」の作成のためにワープロの実習を行な  
った。初めて触れる生徒が大半で、全員が興味をしめ  
したが、13人の生徒に対して4台と絶対数が不足し、  
しかも2回だけだったので、自分のレポートを全  
部打ち込むという所までにはほど遠かった。徳井、  
田中、長谷川の3名で、「報告書」はいちおう完成  
された。

・「とっても良かった。初めてだったので、よくわ  
からなかったが楽しかった。教官室で（の）授業も他  
と違ってよかったです。」(江崎智子)

・「おもしろかった。最初は、よく使い方知らなか  
たからめんどくさいなあって思ってたけど打ちだし  
たらやみつきになりそーでした。」(中田陽子)

・「ワープロは将来役に立つし、きっと使うことにな  
ると思う。だから、もっとやりたかったが、ワー  
ープロばかりになっても、総合学習の意味を失なうので  
……」(伊藤靖)

・「前からワープロがほしいと思っていたのだが、さ  
わったこともなかったので、ひじょうに楽しかった。  
将来、1つほしいと思います。」(市川和己)

(2) 総合学習の報告書の作成について

上に述べたように、報告書はほとんど教師の手によ  
つて完成された。従来から確認されて来たように、総合  
学習が、授業方法の総合化、認識方法の総合化もねら  
っているのであるとしたら、少なくとも生徒達自身の、  
研究→発表→討論→再研究→再発表としての  
研究プロセスの重要性を認識させたかった。研究発表  
の日をもって研究は終りとし、討論の中で出された不  
備や疑問、新しい方向性をもとに、研究内容を再検討  
しようとした生徒はほとんどいなかった。研究報告書  
用の原稿のチェック、印刷原稿の各自による作製等も  
是非やらねばならないことではなかったのかと反省し  
ている。しかしながら、生徒達は、極めて楽天的に次  
のようなことを書いている。

・「これは絶対ほしい。1年間の苦労の結集だから。  
先生、ワープロうってね。」(加藤美穂)

・「こういう形式の授業である以上、レポートはさけ  
られない事で、いたしかたないでしょう。が、すこ  
し、しんどかった。」(市川和己)

・「残しておいてくれてうれしいと思います。作成し  
たのであれば、役に立ってほしいです。」(江崎智  
子)

(3) 来年度の総合学習に望むこと

・「グループ発表にしたらどうか。第1期生としてい

ばれるようなものになってくれたらうれしい。」

(藤村洋介)

・「もっと討論のしっかり出来る総合学習にしてほしい。発言するのがばかりしくなることのないようにして下さい。」(奥村雅一)

・「もっと小さい範囲で身近な事を考えたりすれば、もう少ししらべやすくなるのではないかと思う。」(千葉哲子)

・「高3のいそがしい時期っていうのはあるけど、やっぱり総合学習をとっているコ、全員が毎時間ちゃんとまじめにきいたり自分なりの意見をいったりしていれば、きっと今年以上に成功するんじゃないかなと思います。」(中田陽子)

・「先生方のいきごみとは、うらはらに数10名の生徒たちのやる気というものが小さく、からまわりしたまま、結局最後までできてしまったという感じです。なにが悪いかといえば、私達、生徒側の最初の態度というのが「ただで単位がとれる」という人が多く、そのために、美穂や真城のように「だまされた」という発言がでてきたのだろう。来年度は、初めが肝心だと思います。生徒に対して、ただ“なまけることのできる授業”という感覚をとりのぞき、やる気を出させるようにすれば、きっと授業はもりあがり、よい結果ができると思う。自分のことをいうと内職したりして大辺、めいわくをかけました。すみません。でも、奥村なんかと論争しあっている時は、ひょんなたのしかったですよ。来年もがんばって下さい。」(市川和己)(現文のママ)

・「パターン化した授業は面白味に欠けるので、毎回思考（趣向のこと？）をこらした、普通の授業ではできない思い切った進行方法をやってみては？」

命というテーマは、僕は別に大きすぎないと思う。その中で、自分の一番関心のあるものについてこの授業を通して調べるということは、自分にとって+になるし、討論をすればますますよい。」(伊藤靖)

## 5. 個人的な総括として

授業「生命について」の1年間の流れを追い、その折り折りに生徒たちに書かせてきたものをまとめてみて、一種の空しさにとらわれている。やろうとしたことと結果とが、あまりにかけ離れてはいないか。やろうとしたことが、思うように実現するために、前提条件とその実施方法をじっくりと吟味したと言えるのだろうか。

高3文系選択科目「総合学習」の実施にむかって、私達のグループは84年度と85年度の2年間を準備期間にあててきた。この準備期間中の各メンバーによる授業構想・授業案は、85年度と86年度の本校紀要に報告

ずみである。己れの教科・専門にあまりとらわれない授業をやってみようという最初の確認は、実現されたとは言い難いが、チーム・ティーチングの中で、その専門性なるものが問われ、自ずと越境したり、「人間」としての発言を求められることは予測された。

1年間の授業の流れ、即ち、①テーマの明確化や生徒たちへの動機づけとしての教師による授業、②各自のテーマ決定、自主研究、発表、討論、③全体テーマのもとでの討論というステップを私達は構想していた。最後の③の総括的な討論が足りなかったことは否めないが、このステップそのものは大筋において、仕方のないものと言えよう。

選択している生徒達が、文科系への進学予定者（専門学校も含む）であることはどういう意味を持っていたらうか。「生命について」の授業の中で、生命の誕生についての生物学的アプローチのみが、やや理科的な内容であったと言えようが、生徒たちは当初から受験に役立つことを期待して選択していたわけではない。むしろ、“楽そうだから”“他にとる科目がないから”という消極的な理由で選択した生徒が多かった。そういう消極的な姿勢は、既にふれたように、①13人の授業という条件のなかでも、英単語などの内職をしようとする、②図書館での自主研究の時間も、ムダ話し、居眠りに使ってしまう生徒の方が多い、③自分の発表の際は、プリントする原稿を前の週までに出す、という約束をほとんど守らない、④3学期の最終アンケートを結局、提出しなかった生徒が3名いた、⑤報告書の原稿は、発表の資料と全く同じか大同小異であった、などのウンザリするような消極性につながっていた。しかしながら授業へのノリの悪さを、生徒たちにのみ帰因させても、『総括』とはいえない。

仮りに、生徒たちが高3であるが故に、受験に関係ない科目には消極的であったのだとすれば、それは、最初から分っている条件でしかない。私達は、高3文系選択科目であるから、その選択科目の一つとして、「総合学習」を実践することはカリキュラム上は容易であること、恐らく小人数となり授業もやりやすくなり、討論も活発に展開できること、を予測していた。この点は予測通りに進行したのではないか。選択した13人の生徒に問題があったのか。たしかに、一部に保健室の常連がいたり、欠席、遅刻の目立つ生徒もいた。しかしながら、「テーマに興味があるから」(4名)、「みんなとの話し合いが出来るから」(2名)、「楽しそうだから」(2名)、「小論文などにも役立ちそうだから」(2名)などと、比較的積極的理由で選択した生徒も多かったはずである(86年度本校紀要、P13)。とすれば、「総合学習」を企画し、担当した私達教師側の条件も考えてみなければならない。

86年度は、私達のグループは、安藤（養護、産休のため9月より桜井にバトンタッチ）、石川（理科）、梶原（数学）、川合（体育）、田中（社会）、徳井（技術・数学）、長谷川（国語）、三橋（生物）、安田（養護）の9名であった。週2時間の授業を、時間割上は田中と徳井が担当していることになっていた。田中と徳井はほぼ全授業に参加したが、他の7名は、自分の授業とぶつかっている場合が多く、総合学習で授業を担当する場合は、時間割変更を必要とした。ティーム・ティーチングを標榜していたが、特に2学期の生徒発表に入つてからは、田中・徳井以外のメンバーの出席は少なかった。これは物理的にやむをえないことなのであろうが、少なくとも、発表生徒の指導にあたったメンバーの出席は、時間割変更をしてもらう配慮をすべきだったと思われる。

「労多くして得るもの少ない」という空しさが払拭できないのだが、期待過剰に過ぎるのかも知れない。生徒たちが、話し合いの面白さ、大切さに気づき、物事を総合的に見ることの大切さを認識してくれれば可

とすべきなのかもしれない。本章において引用した多くの生徒たちの意見・感想の中にも、その2つのことを証明しているものを散見することが出来る。また、「生命について」というテーマのもとに、やや強引すぎるくらいに色々な事象を、生命的の尊厳、自然の大切さと結びつけたが、『生命の尊厳、自然の大切さ』という視座から色々な事象をとらえ、アプローチする方法の一端を身につけさせることは出来たのではないかと考えている。

また私達教師の側にも、教科・科目の立場をこえて相互学習することの大切さ、研究し続けることの大切さ、1つのテーマの下でのティーム・ティーチングすることの大切さを教えてくれた。“生命的の尊厳”“自然の大切さ”という大きなテーマの下に、全ての教科や科目、あるいは生活指導や学校行事までもが、どのように結びつかなくてはならないか、そして、そのための条件づくりがいかに難しいか、やりがいのある仕事か、を教訓として学びたい。

### III 総合学習「生命について」の授業実践の まとめと今後の課題

徳井 輝雄

#### 1] はじめに

1983年から1984年にかけて中3を対象にした総合学習を展開する中で、私達は総合学習のねらいとして、人間にとって学ぶとはどういう意味なのかを学んで欲しい、人生における学習の位置づけを学んで欲しい、教師も学んでいるという事を知って欲しい等の思いを持っていた。それは、高3文系選択生を対象にした時にも変わらないものである。ようするに私達は、この総合学習を通じて、生徒の生活意識や学習意欲の面でいうならば、学習の意味を知って欲しい、物事を総合的にとらえて欲しい、そしてさらに生き方を考えるキッカケにして、人生を積極的に生きていって欲しいという願いを込めながら授業をして来た。さらに又、授業の内容面でいうならば、生命を貴び、尊重し、生命を軽視する考え方や行為に対して敏感に反応し正しい態度をとれるようになって欲しいという願いをもっていた。さらに又、授業の方法についていうならば、色々な方法を総合的に使い興味の持てる授業展開をしていきたいと考えていた。見学、実習、学外者の話を聞く、

VTRや映画を見る等々の試みである。そしてさらに学校全体の総合学習化の気運を盛り上げたいと考えていた。

さらに大テーマ「生命について」を選んだ狙いを述べるならば次のようなものである。

『現代社会では、自殺、殺人、戦争、公害等生命軽視のあらわれや、体外受精、男女産み分け、遺伝子工学の実用化など生物学・医療技術の発展にともなういくつかの問題の出現などで、生命やそれにかかわる事柄についてその見解が問われる場面が多くなってきている。生徒達が将来1市民としてそれらに対するなんらかの態度決定を迫られた時、自分の命は勿論のこと、他人の命、人間以外の生き物を含めて、命あるものを尊重する生命観をもって対処してほしい』

1986年4月からはじまった高校三年生文系選択者のうちの13名を対象にして行った「生命について」の授業実践を上述のような観点から総括し、今後に残された課題は何であるかを探べてみたい。

#### 2] テーマは妥当であったか

##### (1) 大テーマ「生命について」